

1-2 パネルディスカッション

日本における保育の課題と展望

panel discussion

第1部 問題提起

～日本におけるECECの課題～



榊原洋一
CRN所長・お茶の水女子大学大学院教授

日本の 幼児教育の 課題と展望

第1回ECEC研究会の最後に行われたパネルディスカッションは、3部からなる。第1部は榊原洋一氏による、日本の幼児教育についての問題提起。第2部はベネッセ教育総合研究所の後藤憲子主任研究員による、「第2回幼児教育・保育についての基本調査」についての報告。第3部は、上記2名に秋田喜代美先生、一見真理子先生、大豆生田啓友先生を加えた5名による総合討論である。

私は小児科医であるが、これまで多くの保育士や幼稚園教諭の方々と仕事を共にしてきた。その経験から、パネルディスカッションのための問題提起として、現在の日本におけるECECの課題を以下の5つにまとめてみた。――

表①参照

1つ目は、「日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか?」ということだ。日本の幼児教育で世界に誇れることは何であり、逆に足りないことは何なのか? と言い換えることもできる。

2つ目は、「そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか?」である。日本では、幼児教育の「代表的」「標準的」「平均的」な保育所・幼稚園を挙げることができるといって問題提起をしてみたい。

3つ目は、「保育の質を測定する基準(ものさし、measure)は何か?」ということだ。別の言い方をすると、「高い幼児教育の質」とは何か? どのような条件を満たせば、それは質の高い幼児

教育といえるのか？ ということを考える必要があるだろう。

4つ目としては、「保育の質を高めるためには、何が必要ならなければならないのか？」ということが挙げられる。これは、理念や精神論ではなく、どのようなことをしなければならないのか、具体的に考えていく必要があるだろう。

5つ目は、前の4つとは少し趣旨が

異なるが、「保育所と幼稚園で行われている幼児教育の内容の本質的な差は何か？」ということだ。幼保一元化を進めるためには、保育者の教育内容ではなく、実際に行われている活動の差が何か？ ということを考える必要があるだろう。

こうした課題について、保育所と幼稚園の先生方に伺ってみたい。

表①

日本におけるECECの5つの課題

- 課題1 日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか？
- 課題2 そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか？
- 課題3 保育の質を測定する基準（ものさし、measure）は何か？
- 課題4 保育の質を高めるためには、何が必要ならなければならないのか？
- 課題5 保育所と幼稚園で行われている保育内容の本質的な差は何か？

第2部

調査データから見る日本の保育

～「第2回 幼児教育・保育についての基本調査」より～



後藤 憲子
ベネッセ教育総合研究所
次世代育成研究室室長

基本的な生活習慣に 重点が置かれている

現在、幼稚園と保育所が制度改革の時期を迎え、非常に大きく変わろうとしている。我々も民間のシンクタンクとして調査データを提供することでより良い保育環境づくりに貢献できればと考え、2012年度に幼児教育・保育についての2回目の調査を行った。

調査のテーマは、園の教育・保育活動、子育て支援活動、園の体制などの実態と、回答した園長の意識である。園児数が30人以上の国公立幼稚園、認可

panel discussion

保育所、認定こども園の園長または施設長を対象に、郵送による自記式アンケートで行った。—図①— この調査結果の中から、今回のパネルディスカッションのテーマにかかわるいくつかのデータを紹介したい。

図②は、「教育・保育目標として特に重視していること」を16項目の中から3つ選んでいただいたものだ。幼稚園、保育所ともに1位が「基本的な生活習慣を身につけること」、2位が「健康な体をつくること」だった。3位は幼稚園では「友だちを大切にし、仲良く協力すること」、保育所では「人への思いやりを持つこと」が挙がったが、他者との関係を大切にするという点では、相似している。1位、2位に関しては、幼稚園教育要領の改定の際に、「健康」の領域で心身の健康や運動の充実、食育、生活習慣に関する指導などの項目が付け加えられたことが影響しているのではないかと考えている。

一方、日本の幼児教育が大切にしてきた、遊びの中でさまざまなものに興味を持ったり、伸び伸びと遊んだりするといった点は、あまり上位に来ていなかった。これは、私自身の所感としては意外であった。

保育者の確保と質の維持が課題

図③は、教育課程・保育課程の編成について尋ねたものだ。ほとんどの園が編成しており、指導計画も作成していた。しかし、毎年見直しをしているかどうかという点で、多少違いが出るという結果であった。

また、保育者の免許・資格保有状況だが、幼稚園教諭と保育士の両方の免許を持っている人は、幼稚園では75.6%、保育所で81.6%と、保育所の方が少し多い結果となった。この背景

には、公立では幼稚園と保育所の職員の人事交流を推し進めていることがあり、ここ10年ほど、行政が両方の免許の取得を求めてきたということや、幼保一元化の流れがある。

学生にとっては、幼稚園、保育所のどちらにも就職できるというメリットがあるが、一方で履修科目が増え、学生が忙しくなったにもかかわらず、実践的な知識やスキルを身につける機会がなかなか得られないという課題もあるようだ。

図④は、保育者の雇用形態である。非正規の保育者は、公立の方が多いという結果であった。その理由としては、自治体の財政難が考えられるだろう。延長保育や早朝保育、預かり保育で保育の時間が長くなった部分を、非正規の保育者が担っているという幼稚園や保育所も多いようだ。非正規の職員は研修を受けにくいという現状もあり、保育者としてのスキルを磨く機会が少ないことも課題だ。



また、図⑤を見てもわかるように、開園時間の長時間化で、園での研修の機会がなかなかつくりにくいという現状もあるようだ。

図⑥は、園運営上の課題について、22項目の中から最も重要な課題だと思ふものを1つ選んでいただいたものである。私立幼稚園を除き、「保育者の資質の維持、向上」がどこの園でも第1位に挙げられている。「保育者の確保」も公営保育所、私営保育所で第2位となっていた。量的な業務の拡大にスタッフの確保が追いついていない、スタッフを確保できても保育者の質をいかに維持するかという点に課題があるのではないかと推測できる。

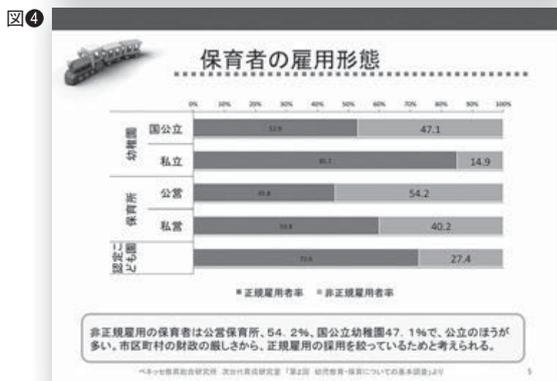
養成課程の教育内容の充実も求められている

図⑦は、保育者の資質向上のために必要なことについて、27項目の中から必

要だと思ふ項目すべてに丸をつけていただいたものだ。私立幼稚園、私営保育所、認定こども園では「保育者の給与面での待遇改善」が第1位に挙げられた。公営保育所では「職員配置基準の改善」が第1位であった。

「養成課程の教育内容の充実」が、幼稚園・保育所、公立・私立の別にかかわらず上位に挙がってきていることにも注目したい。なぜ養成課程の教育内容が課題になっているかを考える必要があるだろう。

図⑧は、私立幼稚園と私営保育所を対象に、認定こども園への移行を考えているかどうかについて聞いたものだ。私立幼稚園の36%が条件によっては移行してもよいと回答していた。その条件としては、施設整備費の保証、職員配置基準を満たすための人件費の保証、会計処理や申請手続きなどの事務手続きの簡素化や一本化などが挙げられていた。



今回ご紹介した調査結果は、幼稚園、保育所の実態の一部を示したものであるが、今後、議論を進めるための参考にしていただければと考えている。

図7



図8



第3部 総合討論

panel discussion

司会● 榊原洋一 Sakakihara Yoichi CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

秋田喜代美 Akita Kiyomi 東京大学大学院教授

後藤憲子 Goto Noriko ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室室長

一見真理子 Ichimi Mariko 国立教育政策研究所総括研究官

大豆生田啓友 Omameuda Hiroto 玉川大学准教授

※所属・肩書きは発表当時2013年6月30日のもの

日本の幼児教育に どのような課題があるか

榊原● 本日はよろしくお願ひいたします。まずは、ECECの課題について、お一人ずつコメントをお願いします。

一見● 本日はこのような席に立たせていただき、ありがとうございます。私自身は、もともと幼児教育の専門ではあり



ませんが、ユネスコを通じた国際協力のセクションにおりましたので、海外の方々を日本の幼児教育の現場にご案内する機会が多くありました。また、ベネッセのアジア地域の5都市の幼児の生活や子育てに関する比較調査にかかわるなど、日本とそれ以外の国の幼児教育のあり方を比較する機会が多かったので、そうした立ち位置から発言させていただきます。

まず、日本の幼児教育と、他のアジアの国の幼児教育は、かなり異なった特徴があるということを感じています。保育に対する期待は、日本以外のアジア地域では遊びを通して知的に発達する、激しい競争社会を生き抜く力を身につけることにあり、一方、日本では子どもの自発的な遊びを通して社会性を身につけたり、友だちや集団の意識を大切にしたりすることが求められているように思います。どちらが優れているかの結論を出そうとすること自体も、それがなぜなのかを考えることは、興味深いことです。

また、日本の幼児教育には遊びを重視する素晴らしい伝統がありますが、それが果たして日本の幼児教育の典型といていいかどうかは議論を深める必要があると思っています。なぜならば、幼児教育の質の保証を考えるときに、どこでどういう幼児教育が行われているかをマッピングしておくこと、実態を把握しておくことが、非常に大切になってくるからです。



国際的にもエビデンスに基づく制度改革が当たり前になってきており、きちんとデータを揃えたうえで、予算を政府に請求していくことが重要になっていますが、秋田先生もおっしゃったように、日本はその点が比較的遅れています。今回、秋田先生が日本のデータを初めてOECDに提供したとき、保育者の待遇や子どもと保育者の比率などの指標が必ずしも芳しくないということが明らかになりました。これをテコにして、予算措置を要求できる段階には入りましたが、震災や政権の不安定さなどさまざまな事情があり、就学前教育に公的な予算を十分に呼び込めないという状況です。ともあれ今後は、行政側が一元的にデータを収集するなどの体制作りが必要です。

大豆生田● 本日はよろしくお願ひします。私は、普段幼稚園や保育所の現場を見ることや、保護者との接点も多いのでこうしたスタンスからお話をさせていただきます。

本日、幼児教育の質保証に関してのデータをもつことの大切さについて、秋田先生がお話されておりました。最近、子どもの運動能力に関しての調査が行われましたが、その結果は特に幼児教育の世界には大きなメッセージであったと思います。自由に遊ぶことと運動能力との関連や、園庭の有無との関係性など、ある程度の規模をもったエビデンスが出てきて、現場にも反映されました。データを揃えることの重要性を痛感しました。

また、先ほど後藤さんが報告されたベネッセの調査からは、園が、保育者の問題を非常に大きな課題として捉えていることがわかりました。これは、多くの現場を訪れる中で、私も実感していることです。

保育者の問題を解決してくために、養成課程の充実の必要性を感じている園が多くありましたが、養成カリキュラムの問題なのか、生活習慣も含めてもったとき

ちんと教育せよということなのか、どのレベルのことを求めているのか、知りたいと思っています。

秋田● 私は、今日は国という大きな視点から、スタンダードというもののあり方についてお話をさせていただきました。しかし一方で、それだけでいいのかとも考えています。むしろ、各園の文化、地域の文化、その固有性で考えるのが実践者の立場ではないかと。幼児教育は多様であり、その多様性の中で、それぞれが誇りを持って質を向上させていくということですが、幼児教育の質を上げていくものはできないとも考えています。

だからこそ、それぞれの園の誇りを得るためにも自園は何か特徴的なのかを知ることが大事ではないかと考えています。

幼児教育の質をどう考え、どう高めていくのか

神原● 幼児教育の質をどう見るかというのは非常に難しい問題がありますね。

一見● OECDで理想とする保育者像の一つとして、ヨーロッパのソーシャルペダゴーク（社会教育士）が挙げられています。専門性が高く、待遇面でも小学校教諭と同等以上で、キャリアも長く、社会、家庭、幼児教育の三者の橋渡しができる専門家です。質保証のネックは、子どもとかかわる大人の力量にかかっていると思いますので、そこに関しての議論が今日も必要だと思われま

す。また、ECECに関する国際的な会議に、日本から参加できる人材がなかなかいないという課題もあると思っています。こうした会議では、保育情報のIT化の促進などがはかられつつありますが、こうした会議に参加できるような、なるべく見晴らしのいい立ち位置にある人材を育成することが必要です。そのためには、省庁の一体化・一本化は不可欠です。



大豆生田啓友
玉川大学准教授

大豆生田● 先ほどの秋田先生のお話にもありましたように、幼児教育の質を考えるには、「スタンダードは何か」を考える国レベルの大きな観点と、「個々の園レベル」という両面から議論を進めることが大切なのだと思います。

ただ、「幼児教育の多様性」というのが、まるっきり多様なのか、それともある程度の共通性があった上での多様なのかを考えることも、一つの鍵になるのかなと思いました。

秋田● 大豆生田先生、的を射た指摘ありがとうございます。私自身は、すべての子どもに保証する質のレベルを上げるのが国や公共の仕事で、そのレベル以上のことは、個々の園の対応であると考えています。各園が学び続けてさらによくなっていくというプロセスにこそ、意味を見いだしたいのです。

そのための鍵は保育者が握っていると、先ほどからの議論で出ていますが、その中でも重要なのは、園長や施設長です。それぞれの先生の力を十分に発揮させ、足りないところを補い合いながら、質を高めていくという「園としての有能さ」を議論していくことが大切ではないでしょうか。

後藤● 私自身も今回の調査を行いながら、現場で起こっている問題を解決していくことが大切ではありますが、そのためにも、幼児教育の質を上げるには大きな観点からも考える必要があり、そこを



秋田喜代美
東京大学大学院教授

どう結びつけていくかが大切だということ
を改めて感じました。

また、先ほど一見先生から、遊びの中
で学ぶのが日本の幼児教育のスタンダー
ドだといわれているが、実態とはズレが
あるのではないかというお話がありまし
た。今、現場の先生方にお話を聞くと、
保護者のニーズにどう応えていくかとい
う点に課題を感じているという意見がと
ても多く出てきます。このことが、ズレ
の原因の一つとして考えられるのではな
いでしょうか。

秋田先生の講演で、コミュニティの中
で幼児教育の質を考えていくという諸外
国の例が挙がっていましたが、先生や保
護者だけでなく、コミュニティ全体で子
どもに必要な幼児教育とは何かを考え
ていくことが、一つの新たな視点として考
えられるのではないかと思います。

養成校が抱える 課題について

榊原● 先ほど、養成校を充実させるこ
との必要性が出てきましたが、これにつ
いて、後藤さん、大豆生田先生からもう
少しコメントをいただけますか？

後藤● この調査を行ったとき、必要だ
と思うことに○をつけてもらうと同時
に、なぜそう思うのかも書いていただい

ています。例えば、「保育者となる人た
ち自身に生活の実体験が不足している」
「幼保両方の免許を取るのに忙しく、実
践的なスキルのトレーニングをする機会
が不足している」などのご指摘がありま
した。

一方で、特別支援の子どもたちをどう
見ていくか、問題を抱えている保護者へ
のカウンセリングも必要など、社会から
の要求レベルが非常に高まっています。
そのため、養成校の課題だと一言で片付
けてしまうのではなく、何が具体的に課
題で、どのような対応が必要なのかを、
一つひとつ分解して、考えていくことが
必要ではないかと思っています。

大豆生田● 確かに、実体験を養成課程
の中にどう組み込むかという課題はある
と思っています。私が所属している玉川
大学では、1、2年生で現場に出る体験
を増やすために、インターンシップを充
実させ、カリキュラム改革を行いました。

ただ、実体験の中身として何が必要か
ということになると少し議論が必要かも
しれません。

榊原● 秋田先生、保育学会長として、
今の養成校への期待などがございましたら、
コメントをお願いします。

秋田● まず、保育士と幼稚園教諭の両
方の免許を取る必要があるために、実体
験が不足するという課題、これはやはり
保育士と幼稚園教諭の資格や養成課程を
いずれいつかは一本化することが大切だ
と考えています。一本化されたカリキュ

ラムの中で、さまざまな特徴をもつ園で豊富な実体験をして、実践力を高めてほしい。非常に難しいことであり、夢でもあります。あえて申し上げたいと思います。

また、個々の保育者の質を上げるという観点では、ある程度実践を積んだあとに、さらに専門性を深めるための基準や資格をつくり、そのための研修を行うということも考えられると思います。例えば、カナダには専門性基準があり、新人が最低限身につけておく基準と、ある程度現場で実践経験を積んだ保育者がさらに専門性を高めるための基準があります。こうした基準を決める職能団体があり、保育者同士がお互いの経験やノウハウを提供し、共通で活用できるデータベースをつくらせたり、研修をしたりしています。

会場とパネリストとの 質疑応答

榊原● ここからは、会場の皆様からご質問をいただきたいと思います。

Q1 八王子で園長をしています。今、幼児教育の現場は、「一刻も早く、人とお金をください」というような、かなり切羽詰まった状況です。そのためにも、早く政治家を動かす物差しが日本につく



一見真理子

れないかと思っています。海外との比較ではなく、現状として日本の子どもの育ちが大変なんだということも国にも深刻に考えてもらいたい。しかし、その大変さを証明できるデータがないという状態です。実際に目の前の子どもや家族を見ているだけで、状況の大変さは伝わってくるので、今の子どもたちの未来をつくるためにも、国の支援を整えていく必要があると思いました。

秋田● 先生が言われたような本当に困難な状況は、よく理解しています。その状況を打開するためにも、保護者や地域の参画によって質を上げていくことが大切だと考えています。園の活動が地域に開かれることによって、例えば、その地域の政治や行政官が、状況を理解していく。このことは、一つのエビデンスになると思います。

数値だけがデータではありません。園がコミュニティの中で抱えている課題を、いろいろな人に参画してもらいながら共有し、対話していく。また、課題だけではなく、質の高い幼児教育をすれば、それだけ子どもが成長していくという事実・エピソードも伝えていく必要があります。その対話というものが、多様性を保証しながら、質を上げていくということにつながるのではないのでしょうか。

一見● 韓国が、OECDの勧告を受けて、ECECにかかわる専門家を集めた、データ共有や一元化のための専門機関を早々と設立しました。日本でも、実践の現場や養成校とリンクして、きめの細かなレベルまでのデータが作成できる機関の設立が本当に待たれると思います。

Q2 横須賀から参加しました。お話を聞いていて、幼児教育の質ということと、保育者の質とは連動していると思いました。先ほど、養成校の課題についてお話がありましたが、現場を見ていますと、遊びを豊かにしていこうというときに、

子どもが遊んでいる瞬間、どういう言葉がけをするかが非常に大切になってきます。しかしどうしても、保育者個人に関わる問題になってしまいます。保育者の質が、子どもを豊かにするか、しぼませてしまうかに大きく影響してしまうのです。

養成校では、「遊び」という科目はありません。夢中で遊んで、その遊びをどう展開したらおもしろいかといったことを、今の学生さんは生活体験として持っています。だから、子どもにも伝えられない。そこに、大きなポイントがあるのではないかと考えています。

大豆生田● 先生がおっしゃられたこと、私は賛成です。今の若い世代は、遊び込むという経験が非常に減っています。私も授業では、例えば泥だんごを作ってみるなど、「子どもになってみて、学ぶ」ということを大事にしています。

ただ、それを個人の問題だと言ってしまうと、限界があります。それぞれの保育者なりのあり方を、園の中でつくっていくことも大切だと思っています。

幼児教育の質を高めるためにこれからできることは何か

神原● パネリストの先生方、最後に一言ずつお願いします。

秋田● 外を鏡にして、自園や自国を振り返ってみると、良いところが見えてく

るということは多くあると思います。子どもと一緒に、日本の文化や良さを大切にしたという心が必要だろうと思いました。

一見● 日本の幼児教育の質の良さを、いろいろな条件が整わないために落としてしまうことのないように、政治家も巻き込みながら訴え続けていくことが大事だと思いました。また、世論でムードを誘導していくことも効果的だと思います。例えば、日本での幼稚園や保育所のエピソードをたくさん集めて、宮藤官九郎さんのような方にシナリオを書いたいただき、朝の連続ドラマにしてはどうかなどと考えていました。(笑)

大豆生田● 一見先生が、日本は幼児教育に夢を描く傾向が高いと話されていて、この視点はとても大事なことだと思いました。幼児教育に夢が描けるかということの中に、幼児教育が良くなっていく要素が多く含まれていると思います。夢が描ける状況をどうつくっていくのが、エビデンスを揃えることと並んで大切なことだと思いました。

後藤● 一見先生のドラマ化の話、私も大賛成です。そういうところで具体的な事例や、こんなことが行われているんだということ、世の中の方に伝えていくことも必要なのかなと思いました。

また、調査をしていると、ネガティブなことが出てきやすいのですが、調査の中では、認定こども園になったことの良さもたくさん挙がってきています。ニュースでは、保育所が足りないことばかりが取り上げられてしまっていますが、ポジティブな回答も伝えていきたい、良いニュースも伝えられる調査をしていきたいと思いました。

神原● 本日は長い時間、ありがとうございました。

